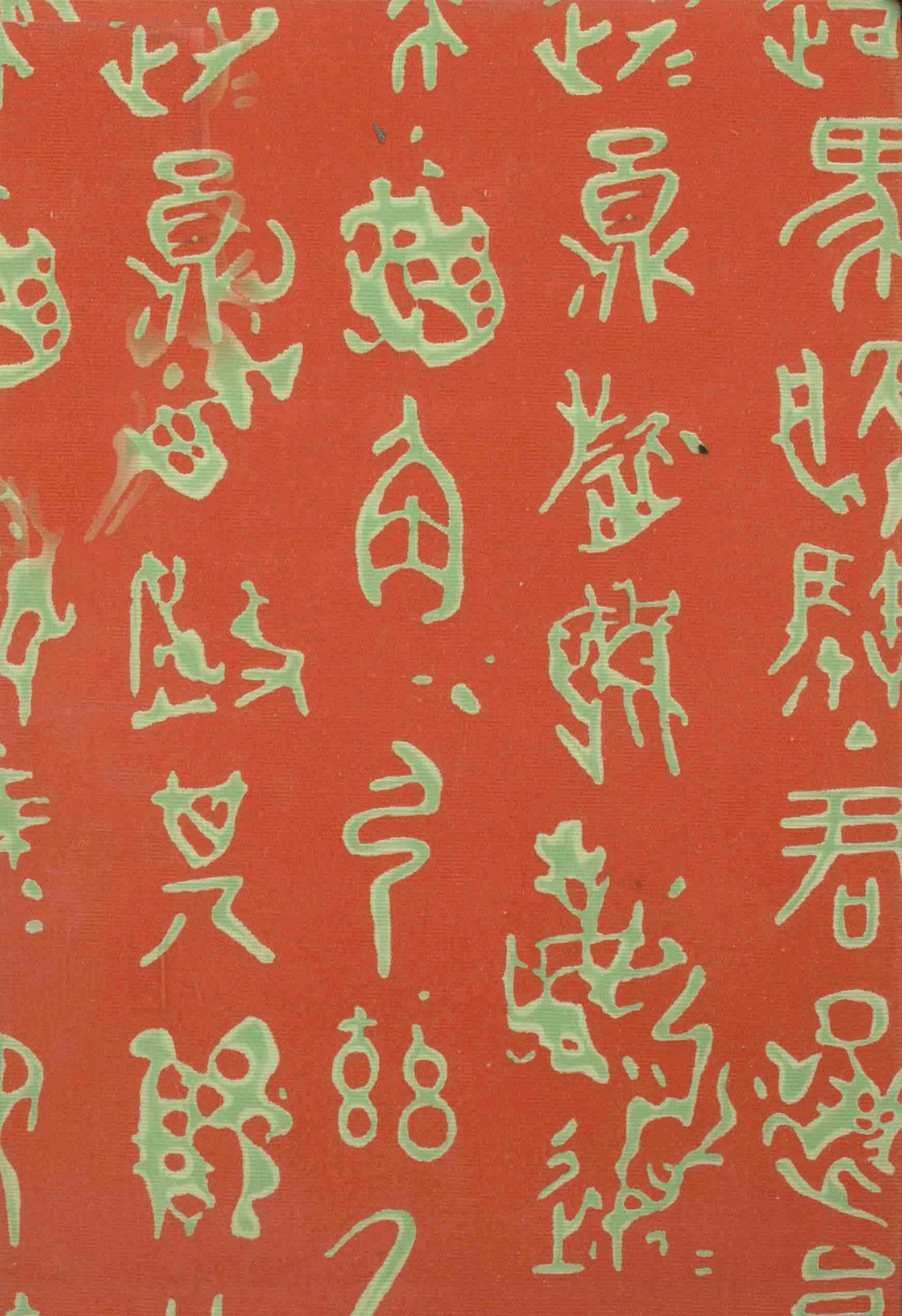

漱石全集
第九卷

文學論

第九回配本（全十七卷）

漱石全集　第九卷　文學論
定價　二千八百圓

昭和四十一年八月二十三日　第一刷發行
昭和五十年八月十一日　第二刷發行

著者　夏目漱石

發行者　岩波雄二郎

發行所　東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

文學論　二七
解説　五二一
注解　五四七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文學論

序

余は此書を公けにするにあたつて、此書が如何なる動機のもとに萌芽し、如何なる機緣のもとに講義となり、今又如何なる事故の爲めに出版せらるゝかを述ぶるの必要あるを信ず。

余が英國に留學を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等學校教授たるの時なり。當時余は特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適當なる人あるべきを信じたれば、一應其旨を時の校長及び教頭に申し出でたり。校長及び教頭は云ふ、他に適當の人あるや否やは足下の議論すべき所にあらず、本校は只足下を文部省に推薦して、文部省は其推薦を容れて、足下を留學生に指定したるに過ぎず、足下にして異議あらば格別、左もなくば命の如くせらるゝを穩當とすと。余は特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辭すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へて退けり。

余の命令せられたる研究の題目は英語にして英文學にあらず。余は此點に就て其範圍及び細目を知るの必要ありしを以て時の專門學務局長上田萬年氏を文部省に訪ふて委細を質したり。上田氏の答へには、別段窮屈なる束縛を置くの必要を認めず、只歸朝後高等學校もしくは大學にて教授すべき課目を專修せられたき希望なりとありたり。是に於て命令せられたる題目に英語とあるは、多少自家の意見にて變更し得るの餘地ある事を認め得たり。かくして余は同年九月西征の途に上り、十一月目的地に着せり。

着後第一に定むべきは留學地なり。オクスフォード、ケムブリツヂは學問の府として遠く吾邦にも聞えたれば、其いづれにか赴かんと心を煩はすうち、幸ひケムブリツヂに在る知人の許に招かるゝの機會を得たれば、觀光かた〳〵彼地へ下る。

こゝにて尋ねたる男の外、二三の日本人に逢へり。彼等は皆紳商の子弟にして所謂ゼントルマンたるの資格を作る爲め、年々數千金を費やす事を確め得たり。余が政府より受る學費は年に千八百圓に過ぎざれば、此金額にては、凡てが金力に支配せらるゝ地に在つて、彼等と同等に振舞はん事は思ひも寄らず。振舞はねば彼土の青年に接觸して、所謂紳士の氣風を窺ふ事さへ叶はず、假令交際を謝して、唯適宜の講義を聞く丈にても給與の金額にては支へ難きを知る。よしや、萬事に意を用ゐて、此難關を切り拔けたりとて、余が目的の一たる書籍は歸朝迄に一卷も購ひ得ざるべし。且思ふ。余が留學は紳商子弟の呑氣なる留學と異なり。英國の紳士は學ばざる可からざる程、結構な性格を具へたる模範人物の集合體なるやも知るべからず。去れど余の如き東洋流に青年の時期を經過せるものが、余よりも年少なる英國紳士に就て其一擧一動を學ぶ事は骨格の出來上りたる大人が急に角兵衞獅子の巧妙なる技術を學ばんとあせるが如く、如何に感服し、如何に崇拜し、如何に欣慕して、三度の食事を二度に減ずるの苦痛を敢てするの覺悟を定むるも遂に不可能の事に屬す。之を聞く彼等は午前に一二時間の講義に出席し、晝食後は戸外の運動に二三時を消し、茶の刻限には相互を訪問し、夕食にはコレヂに行きて大衆と會食すと。余は費用の點に於て、時間の點に於て、又性格の點に於て到底此等紳士の擧動を學ぶ能はざるを知

つて彼地に留まるの念を永久に斷てり。

オクスフォードはケムブリッヂと異なる所なきを信じたれば行かず。北の方蘇國に行かんか、叉は海を渡りて愛蘭土に赴かんかと迄考へたれど、雙方とも英語を練習する地としては甚だ不適當なるを以て思ひ留まる。同時に語學を稽古する場所としては倫敦の尤も優れるを認めたり。是に於て此地に笈を卸す。

倫敦は語學練習の地としては尤も便宜なりと云へり。其理由は語るの要なし。只余はしかく信じたるのみならず、今に於てもしかく信じて疑はず。去れど、余は單に語學に上達するの目的を以て英國に來れるにあらず。官命は官命なり、余の意志は余の意志なり。上田局長の言に背かざる範圍内に於て、余は余の意志を滿足せしむるの自由を有す。語學を熟達せしむるの傍余が文學の研究に從事したるは、單に余の好奇心に出でたりと云はんよりは、半ばは上田局長の言を服膺せるの結果なるを信ず。

誤解を防ぐが爲めに一言す。余が二年の日月を擧げて語學のみに用ゐざりしは、語學を輕蔑して、學ぶに足らずと思惟せるが爲めにあらず。却つて之を重く視過ごしたるの結果のみ。發音にせよ、會話にせよ、文章にせよ、たゞ語學の一部門のみを練習するも二年の歲月は決して長しとは云はず。況んや其全般に渉つて、自ら許す底の手腕を養ひ來るをや。余は指を折つて、余が留學期の長短を考へ叉余の菲才を以て、期限内に如何程か上達し得べきかを考へたり。篤と考へたる後、余は到底、余の豫想通りの善果を豫定の日限内に收め難きを悟れり。余の研究の方法が、半ば文部省の命じたる條項を脱出せるは

當時の狀態として蓋し已を得ざるに出づ。

文學を研究せば如何なる方法を以て、如何なる部門を修得すべきかは次に起る問題なり。回顧すれば、余の淺薄なる、自ら此問題を提起して、遂に何等の斷案に逢着せざりしを悲しむ。余が取れる方針は遂に機械的ならざるを得ず。余は先づ走つて大學に赴き、現代文學史の講義を聞きたり。又個人として、私に教師を探り得て隨意に不審を質すの便を開けり。

*大學の聽講は三四ケ月にして已めたり。豫期の興味も智識をも得る能はざりしが爲めなり。*私宅教師の方へは約一年程通ひたりと記憶す。此間余は英文學に關する書籍を手に任せて讀破せり。無論論文の材料とする考もなく、歸朝の後教授上の便に供するが爲めにもあらず、只漫然と出來得る限り多くの頁を繙へし去りたるに過ぎず。事實を云へば余は英文學卒業の學士たるの故を以て選拔の上留學を命ぜらるゝ程、斯道に精通せるものにあらず。卒業の後東西に徂徠して、日に中央の文壇に遠ざかるのみならず、一身一家の事情の爲め、擅まに讀書に耽けるの機會なかりしが故、有名にして人口に膾炙せる典籍も大方は名のみ聞きて、眼を通さゞるもの十中六七を占めたるを平常遺憾に思ひたれば、此機を利用して一冊も餘計に讀み終らんとの目的以外には何等の方針も立つる能はざりしなり。かくして一年餘を經過したる後、余が讀了せる書冊の數を點檢するに、吾が未だ讀了せざる書冊の數に比例して、其甚だ僅少なるに驚ろき、殘る一年を擧げて、同じき意味に費やすの頗る迂濶なるを悟れり。余が講學の態度はこゝに於て一變せざるを得ず。

(青年の學生につぐ。春秋に富めるうちは自己が專門の學業に於て何者をか貢獻せんとする前、先づ全般に通ずるの必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば白頭に至るも遂に全般に通ずるの期はあるべからず。余の如きものは未だに英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも依然として通ぜざる可しと思ふ。)

時日の逼れると、檢束なき讀書法が、當時の余をして、茫然と自失せしめたる外に、余を促がして、在來の軌道外に逸せしめたる他の原因あり。余は少時*好んで漢籍を學びたり。之を學ぶ事短かきにも關らず、文學は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左國史漢より得たり。ひそかに思ふに英文學も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を擧げて之を學ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。余が單身流行せざる英文學科に入りたるは、全く此幼稚にして單純なる理由に支配せられたるなり。在學三年の間は物にならざる羅甸語に苦しめられ、物にならざる獨逸語に窮し、同じく物にならざる佛語さへ、うろ覺えに覺えて、肝心の專門の書は殆んど讀む遑もなきうちに、既に文學士と成り上りたる時は、此光榮ある肩書を頂戴しながら、心中は甚だ寂寞の感を催ふしたり。

春秋は十を連ねて吾前にあり。學ぶに餘暇なしとは云はず。學んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業せる余の腦裏には何となく英文學に欺かれたるが如き不安の念あり。余は此の不安の念を抱いて西の方松山に赴むき、一年にして、又西の方熊本にゆけり。熊本に住する事數年未だ此不安の念の消えぬうち倫敦に來れり。倫敦に來てさへ此不安の念を解く事が出來ぬなら、官命を帶びて遠く海を渡れる主意の

立つべき所以なし。去れど過去十年に於てすら、解き難き疑團を、來る一年のうちに晴らし去るは全く絕望ならざるにもせよ、殆んど覺束なき限りなり。

是に於て讀書を廢して又前途を考ふるに、資性愚鈍にして外國文學を專攻するも學力の不充分なる爲め會心の域に達せざるは、遺憾の極なり。去れど余の學力は之を過去に徵して、是より以後左程上達すべくもあらず。學力の上達せぬ以上は學力以外に之を味ふ力を養はざる可からず。而してかゝる方法は遂に余の發見し得ざる所なり。飜つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある學力あるにあらず、然も余は充分之を味ひ得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも、漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず。學力は同程度として好惡のかく迄に岐かるゝは兩者の性質のそれ程に異なるが爲めならずんばあらず、換言すれば漢學に所謂文學と英語に所謂文學とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。

大學を卒業して數年の後、遠き倫敦の孤燈の下に、余が思想は始めて此局所に出會せり。人は余を目して幼稚なりと云ふやも計りがたし。余自身も幼稚なりと思ふ。斯程見易き事を遙々倫敦の果に行きて考へ得たりと云ふは留學生の恥辱なるやも知れず。去れど事實は事實なり。余が此時始めて、こゝに氣が付きたるは恥辱ながら事實なり。余はこゝに於て根本的に文學とは如何なるものぞと云へる問題を解釋せんと決心したり。同時に餘る一年を擧て此問題の研究の第一期に利用せんとの念を生じたり。

余は下宿に立て籠りたり。一切の文學書を行李の底に收めたり。文學書を讀んで文學の如何なるもの

なるかを知らんとするは血を以て血を洗ふが如き手段たるを信じたればなり。余は心理的に文學は如何なる必要あつて、此世に生れ、發達し、頽廢するかを極めんと誓へり。余は社會的に文學は如何なる必要あつて、存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓へり。

余は余の提起せる問題が頗る大にして且つ新しきが故に、何人も一二年の間に解釋し得べき性質のものにあらざるを信じたるを以て、余が使用する一切の時を擧げて、あらゆる方面の材料を蒐集するに力め、余が消費し得る凡ての費用を割いて參考書を購へり。此一念を起してより六七ケ月の間は余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠實に研究を持續せる時期なり。而も報告書の不充分なる爲め文部省より譴責を受けたるの時期なり。

余は余の有する限りの精力を擧げて、購へる書を片端より讀み、讀みたる箇所に傍註を施こし、必要に逢ふ毎にノートを取れり。始めは茫乎として際涯のなかりしもの丶うちに何となくある正體のある様に感ぜられる程になりたるは五六ケ月の後なり。余は固より大學の教授にあらず、從つて之を講義の材料に用ゐるの必要を認めず。又急に之を書物に纏むるの要なき身なり。當時余の豫算にては歸朝後十年を期して、充分なる研鑽の結果を大成し、然る後世に問ふ心得なりし。

留學中に余が蒐めたるノートは蠅頭の細字にて五六寸の高さに達したり。余は此のノートを唯一の財産として歸朝したり。歸朝するや否や余は突然講師として東京大學にて英文學を講ずべき依囑を受けたり。余は固よりか丶る目的を以て洋行せるにあらず、又か丶る目的を以て歸朝せるにあらず。大學にて

英文學を擔任教授する程の學力あるにあらざる上、余の目的はかねての文學論を大成するに在りしを以て、教授の爲めに自己の宿志を害せらるゝを好まず。依つて一應は之を辭せんと思ひしが、留學中書信にて東京奉職の希望を洩らしたる友人（大塚保治氏）の取計にて、殆んど余の歸朝前に定まりたるが如き有様なるを以て、遂に淺學を顧みず、依托を引き受くる事となれり。

講義を開く前には如何なる問題を擇ばんかと苦心せるが、余は今日文學を研究する學生に取つては、余が文學論を紹介するの、尤も興味多く、且つ時機に適せるを感じたり、余は田舍に教師となり、田舍から洋行し、洋行から突然東京に舞ひ戻つたる人間なり。當時わが中央文壇の潮流が如何なる方面に動きつゝあるかは、殆んど知るべくもあらず。去れど摯實なる勞力に因つて得たる結果を尤も高等なる學問を修めて、未來の文運を支配する青年の前に披瀝するは余の最も光榮とする所なるを以て先づ此の問題を選んで學生諸子の批判を仰がんと決意せり。

不幸にして余の文學論は十年計畫にて企てられたる大事業の上、重に心理學社會學の方面より根本的に文學の活動力を論ずるが主意なれば、學生諸子に向て講ずべき程體を具せず。のみならず文學の講義としては餘りに理路に傾き過ぎて、純文學の區域を離れたるの感あり。余の勞力はこゝに於て二途に出でたり。一は纏まらぬものを、既に蒐集せる材料にて、ある程度迄具體的に組織する事なり。二は略系統的に出來上がりたる議論を可成純文學の方面に引き付けて講說する事なり。

身心の健康及び使用時間の許さぬうちに在つて、此兩者を能くし得たりとは決して思はず。去れども

其企てが如何なる事實となつてあらはれたるかは、此書の内容の證明する所なり。講義は毎週三時間にて、明治三十六年九月に始まつて三十八年六月に渡り、前後二學年にして終る。*講義の當時は余が豫期せる程の刺激を學生諸子に與へざりしに似たり。

第三學年にも此講義の稿を續くべかりしを種々の事情に遮ぎられて果さず、已に講述せる部分の意に滿たぬ所、足らざる所を書き直さんとして又果さず、約二年の間其儘にて筐底に横はりしを、書肆の乞に應じて公けにする事となれり。

公けにする事を諾したる後も、身邊の事情に束縛せられて、わが舊稿を自身に淨寫する暇さへ見出し得ず。已を得ず、友人*中川芳太郎氏に章節の區分目錄の編纂其他一切の整理を委托す。中川氏は此講義のある部分に出席したる上、博洽の學と篤實の質をかねたれば、余の知人中にて、かゝる事を處理するに於て尤も適當の人なり。余は深く氏の好意を德とす。苟しくも此書の存せん限り、氏の名を忘れざるを期す。氏の親切によらずんば、現在の余は遂に此書を出版するの運びに至らざりしならん。況んや中川氏他日若し文界に名を成さば、此書或は氏の名によつて、世に記憶せらるゝに至るも計るべからざるをや。

以上述べたる通り、此書は余の熱心なる勞力によつて組織せられたるものなり。但十年の計畫を二年につゞめたる爲め(名は二年なるも出版の際修正に費やしたる時間を除いて實際に使用せるは一夏なり)又純文學學生の所期に應ぜんとして、本來の組織を變じたる爲め、今に至つて未成品にして、又未完品

なるを免がれず。去れども學界は多忙なり。多忙なる學界に於て、余は他より一倍多忙なり。足らざるを補ひ、正すべきを正し、繼ぐべきを繼いで、然る後、世に問はんとすれば、余が身邊の狀況にして一變せざるよりは、生涯の日月を費やすとも遂に世に問ふの期はあるべからず。是余が此未定稿を版行する所以なり。

既に未定稿なるが故に現代の學徒を教へて、文學の何物たるかを知らしむるの意にあらず。世の此書を讀む者、讀み終りたる後に、何等かの問題に逢着し、何等かの疑義を提供し、或は書中云へるものよりも一歩を進め二歩を拓きて向上に路を示すを得ば余の目的は達したりと云ふべし。學問の堂を作るは一朝の事にあらず、又一人の事にあらず、われは只自己が其建立に幾分の勞力を寄附したるを、義務を果たしたる如くに思ふのみ。

倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英國紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を營みたり。倫敦の人口は五百萬と聞く。五百萬粒の油のなかに、一滴の水となつて辛うじて露命を繋げるは余が當時の狀態なりといふ事を斷言して憚からず。清らかに洗ひ濯げる白シャツに一點の墨汁を落したる時、持主は定めて心よからざらん。墨汁に比すべき余が乞食の如き有樣にてヱストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつゝある此大都會の空氣の何千立方尺かを二年間に吐呑したるは、英國紳士の爲めに大に氣の毒なる心地なり。謹んで紳士の模範を以て目せらるゝ英國人に告ぐ。余は物數奇なる醉興にて倫敦迄踏み出したるにあらず。個人の意志

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com